Business now ビジネス scene#13

ヨシザワ印刷㈱（長野県飯田市）

地域密着型企業として直接取引で約60年

オフセットとラベルの２本柱

すべて自社で一貫生産「デジタル機は魔法の箱」

ヨシザワ印刷㈱（長野県飯田市鼎下茶屋、吉澤和人社長、☎0265・24・4438）は、1955年に先代の吉澤吏郎氏が、吉沢印刷㈲として活版印刷で創業。66年からラベル印刷を、72年からはオフセット印刷を手がけ、地域密着型の総合印刷会社として展開、発展してきた。吉澤和人氏は、亡き先代の後を継ぎ3年前に社長へ就任。56年間にわたって築いてきた技術や顧客からの信頼などを大切にしつつ、6月に導入したデジタル印刷機を新たな柱に加え、躍進しようとしている。同社のある飯田市は、長野県松本市から中央高速で約1時間30分の位置にあり、信州最南端の市として南信州の中心的役割を果たしている。青果業や菓子製造などが盛んな地元で顧客の各種ニーズに対応する吉澤社長に、これまでの同社の歩みと展望を聞いた。（鈴木）

吉澤 和人社長

――シール・ラベルだけでなく商印や紙器まで幅広く展開されています

「55年に先代が創業した当時は、活版印刷を手がけ、ハガキや伝票などを印刷していました。11年後には、地元企業のニーズを満たすため、ラベル印刷機1号機を導入してシール・ラベルの製造を開始するとともに、72年からはオフセット印刷による商業印刷全般も展開するようになりました。現在は、パンフレットやカタログ、製本のほか、紙器、シール・ラベルなどまで印刷物全般を自社で製造しています。デザイン部、製版部、オフセット印刷部、製本部が本社工場に、また97年には、本社から車で2、3分のところにシールラベル工場（飯田市鼎名古熊）を設立し、現在2拠点で展開しています。ラベルとオフセットの割合は、45対55という状況。昨今のオフセット業界は、軒並み厳しい営業環境になっているほか、受注から納品までの期間も長いことから、今後は、ラベルの仕事をもう少し増やしていきたいと考えています」

――かなり幅広い業務内容で、ラベル印刷会社の中ではユニークな展開です

「UJ飯田には20社ほど印刷会社がありますが、プリプレスから加工まですべて行うような自社完結型の企業がほとんどです。ですから、全国のラベル印刷会社から見れば、当社はちょっと変わった展開となるのでしょうが（笑）、当地ではごく普通の印刷会社です。飯田は、〝南信州の小京都〟と言われ、人形劇など伝統芸能が多く伝わる町です。そのため、文化意識も高く、昔から地域に根ざしたコミュニティー誌などが多く発刊され、先人達は知識や教養をそれらによって深めてきたこともあって、印刷業が発展してきたという背景があります」

ラベルデザインの統一感も、直接取引で自社製作ならでは

――ラベル印刷業としては、後発に当たりますが、どのような展開を

「先代がラベル印刷を始めた当時、立ち上げの苦労はありましたが、それなりに仕事は入ってきたようです。先代は存命であれば、今年で83才。社長業とオペレーターを兼務するたたき上げの職人でした。昔から同業者との横のつながりがもっとあると良かったのですが、四方を山に囲まれ、都市部にも遠いという地理的な環境からあまり交流が無く、必然的に、商圏も南信エリアにほぼ限られてきました。しかし、おかげさまで地元では、りんご、なし、さくらんぼなどの果物栽培が盛んなほか、生菓子や半生菓子、名産の寒天商品や漬け物など、食品製造が盛んなため、オフセットを含め500社にのぼる地元エリアのブランドオーナーと直接取引を築くことができました。直間比率は約9割が直接取引で、顧客から直接シール・ラベルに対するいろんな要求が聞けるというのが当社の利点だと考えています」

――社長は、これまでどのような業務に携われてこられましたか

「高校卒業後、東京でデザインを学び、その後当社へ入社。最初は活版の版下デザインを手書きで起こす作業をしていました。そのうち先代から、営業をやってみないかと言われ、途中異業種に移った時期もありましたが、20年以上、ルートセールスから新規開拓まで、営業活動を続けてきました。今と昔とでは、営業環境はまったく異なりました。価格競争が激しくなり、同じ技術、同じ仕事ではやっていけない時代です。だからこそ、既存の業務に加え、新たな展開をしていかなければ生き残ってはいけません」

97年に設立されたシールラベル工場

間欠機、平圧機、デジタル印刷機が整然と並ぶ

――ラベル部門にデジタル印刷機を導入したのは、新規開拓の意味合いが大きかったと…

「ラベル部門は、これまで平圧機8台と凸版間欠機2台で、各種食品ラベルを中心に展開してきました。それに、顧客が欲するデザインのままに仕上げられるデジタルラベル印刷機を加えることで、3本柱で、新たな営業展開ができるのではと考えたのです。インクジェット技術のデジタル印刷機として、02年にエプソンから『PL－1000』が発表された際には、さすがだとは思いましたが、まだ当社では使えないと考えていました。その後、08年のラベルフォーラムジャパンで同社の『SurePress』を見た時には、まさに魔法の箱だ、と思い、これはいけると確信しました」

――社長の考えに同機がずばりマッチングした最大のポイントは

「平圧機の仕事は色数が少ないラベル、凸版間欠機はそれより色数が多く品質も高いもの、そして、デジタル機では、アナログ機で再現が難しい5%以下の網点をスキルレスで実現し、食品ラベルでニーズの高いグラデーションや写真画像をデザインにどんどん使っていく、という展開ができるようになると考えたのです。当社が手がけるラベルはリピートジョブも多く、熟練オペレーターの技術をもってしても、色味はどうしても若干異なってしまいます。しかし、デジタル印刷であればそれは絶対にない。また、多くのブランドオーナーには、企業規模の大小にかかわらず、これまで提案できなかったデザインを幅広く提供できるようになります。当社の顧客にとっては、クレームの消失と新たなメリットの創出で、これまで以上に双方に強いきずなが結べる一方、当社としては新規顧客開拓がしやすい環境になると考えたのです。レタープレスCTPを導入することも検討していましたが、シール・ラベルの仕事は、一気にデジタル印刷機へ駒を進め、早く顧客が欲しているラベルを供給できるようにしたいと考えました」

――それができるバックグランドとして、プリプレスを内製化しているということも大きいですね

「当社は、すべての印刷物のデザイン制作を5人の社員で内製化しており、製版も、オフセットCTPやラベル向け製版機で内製化しています。そのため、最短で1日という仕事も多くお受けしています。当社にはパートが1人もおらず、27人全員が社員というのも、技術や意識を高めている要因の1つになっているかと思います」

――デジタル機を入れて1カ月が経過されましたが、現状は

「営業面、技術面でトレーニングやセミナーを受けたのち、通常稼働に入っていますが、印刷に関しては問題なくできており、現在は、さまざまなデザインのラベルを印刷見本として刷って顧客にご紹介する作業に移っています。仕事の仕分けについては、5000枚以下はデジタル機でやりたいと考えています」

――課題は

「印刷品質は抜群で、先日も刷り見本を菓子卸担当のデザイナーに見せたところ、これならいろんなデザインができるし、試作もできるねと喜ばれました。課題とすれば、白インクと後加工…（笑）。白インクが必要なラベルについては、メーカーが開発途上ですので、現状は、アナログ機で処理してから対応するように考えています。後加工については、やはりデジタル印刷機である以上、デジタルで抜き加工をしたい。ここができないからこの印刷機はここまで、という意識を社内に植え付けてしまう前に、解決策をなんとか考え、デジタルでのワンパス製造を形にしたいですね。現在、それを試行錯誤中で、プロッターとの連動テストも行っています。もともと、紙器用の複雑な抜き文字や極小ロットのラベルなどは、デザイン部で出力してプロッターで抜き加工し、カス上げは手作業で処理するということを日常的に行っており、刃の紙への当たり調節など技術的なノウハウは、豊富に蓄積しています。また、SurePressについては、よく印刷スピードが遅いと問題にされますが、紙幅が広く多面付けが可能ですから、生産性ではまったく問題はないです。それよりも食品ラベルに必要な印刷品質をクリアし、水性でにおいがない、厚盛りもないところは大きなメリットです」

――今後の展望を

「デジタル機を導入することで、既存の仕事の置き換えだけではなく、発想豊かに新しく斬新な自社開発製品を展開していこうと、若手社員2人を新規採用しました。当社にまだ体力のあるこの時期に、ラベル製造では新しい技術であるデジタル機を導入し、新たな1歩をいち早く踏み出すことで、5年後、10年後と企業を継続していけるのだと思います。そして、地元密着型企業として60年近く歩んできた企業だからこそ、どうしたら顧客に喜んでもらえるかということを常に念頭に置き、今後も価格だけ、利便性だけではない、血の通った顧客に愛され支持される企業として、展開していきたいです。企業を大きくではなく、社員の質を高めつつ『この仕事はできません』ではなく、常に『できるかもしれない』という方向性で、顧客と一緒にどうしたらヒット商品になるかを模索し、形にしていきたい。さらには、当社の社員にも、ヨシザワ印刷の社員で良かったと思ってもらえる企業として、発展していきたいと考えています」

ラベル工場内のIJデジタル印刷機。抜きは一部プロッターで

各種印刷物のデザイン製作はすべて自社で行う

二人三脚で同社の経営を見ている吉澤直子取締役＝写真左＝のコメント

「これまでもそうしてきたように、アナログとデジタルをうまく融合させ、何でも知恵を出し、ズクを出し（飯田地方の方言＝面倒がらずやる気を出して動くこと）、情熱を注ぎ、出来ないことも頭で考え、どんどん仕事を進められるようにしていきたいですね。機械を生かすもダメにするのも使う人次第です」

「当社はこれまで、先頭を走っていくというより、最後の最後で皆さんを追っかけていく形で、なんとかやってきました。時代の推移とともに変化は急で激しくなるばかりですが、ゆっくりと、ただ常に、日本一とも言われる名産品を作り出す地元飯田のブランドオーナーに喜ばれる仕事を、今後も一所懸命に取り組んでいきたいと考えています」

地元の食品ラベルを豊富に展開。デザインから顧客と二人三脚で取り組む

Inkjet Digital Label Press SurePress L-4033A　シュアプレスのホームページ http://surepress.jp　エプソン販売株式会社　セイコーエプソン株式会社